

〔優秀賞〕

◇ 「らしき」を出せる社会 ◇

氷室小学校 6年 長島 健太

ぼくは3年生ぐらいから、学校に行ってみ  
んなと生活することが苦手になりました。朝  
学校に行く準備をしているとお腹が痛くなり、  
行けなくなりました。そんな様子を家族や先  
生が心配して、少しの時間でもいいから登校  
できるようにと考えてくれて、保健室で過  
す日々から始めることになりました。先生は、  
「健太くんが学校に少しでも来てくれるだけ  
でいいんだよ。」

と言ってくれました。最初は勉強をするので  
はなく、ぼくが興味のあることの話をしたり、  
本を読んだりしていました。

無理にみんなと合わせて活動していたこと  
に疲れてしまったのか、自分の気持ちをすぐ  
に伝えられず、どうしていいか分からず悩ん  
でいました。友達もそんなぼくを見ると、ど  
う言葉をかけていいか迷っていたと思います。  
でも、

「健太くん、おはよう。」

と、いつも変わらず接してくれました。少し  
ずつみんなと移動教室にも行けるようになり、  
ぼくの気持ちも落ち着いてきました。

4、5年生になっても、気持ちがついてい  
けないときには保健室に行っていました。周  
りから見るとわがままに見えるかもしれない  
など何度も思いましたが、先生たちが助けて  
くれたおかげで、がんばって過ごすことがで  
きました。今考えると、毎日当たり前に教室  
で過ごす学校生活をしなければならないとい  
う気持ちが強すぎたのかもしれない。

そのころから、ぼくはヘアドネーションを

しようと髪の毛を伸ばすようになりました。  
髪の毛を伸ばすことで、周りにいろいろ言わ  
れる不安もありましたが、だれかのために役  
立つことだからと強く思い、

「髪の毛は寄付するんだよ。」

と自分で言えるようになりました。自分は無  
理に合わせなくていいんだ、自分のできるこ  
とをやろうと、少しずつ自分らしきを考えら  
れるようになりました。

6年生になると、今まで入れなかったプー  
ルに入れました。それは、ジェンダー水着を  
着たからです。上下の水着を着たことで、プ  
ールが好きになりました。あんなに嫌だった  
はずのプールが、今ではとてもよい思い出に  
なっています。だれもが悩みはあります。そ  
れを一つ解決するだけで、こんなに楽しい気  
持ちになれることに気付きました。

ぼくは、まだ学校という社会でしか生活し  
ていません。その中で初めて、ジェンダーと  
いう言葉を知りました。男だから女だからと  
区別するのではなく、その人が生きやすい自  
分らしきが大切なんだと分かりました。

人数の少ないぼくの学校だから実現できた  
経験が、他の学校でも広がってほしいと思  
いました。そうすれば学校生活もその先の未  
来も、性別に関係なく一人一人のらしきが輝く、  
みんなが過ごしやすい社会になるはずです。